

北海道ユキワリソウ雑録

飯沼慾齋以前

2017年に出版された平凡社の「改訂新版 日本の野生植物」。サクラソウ属は、サクラソウ、カッコソウ、シコクカッコソウ、オオサクラソウ、エゾオオサクラソウ、イワザクラ、シナノコザクラ、コイワザクラ、クモイコザクラ、ミョウギコザクラ、チチブイワザクラ、テシオコザクラ、ヒダカイワザクラ、カムイコザクラ、ハクサンコザクラ、ミチノクコザクラ、エゾコザクラ、ヒナザクラ、クリンソウ、ユキワリソウ、ユキワリコザクラ、サマニユキワリ、レブンコザクラ、ユウバリコザクラ、ソラチコザクラ、ヒメコザクラの26種類が載っている。

写真を見るとどれも良く似ている。そこでそれぞれの関係が分かりやすいように、属と種の間分類単位“節”に分けて一覧表にしてみた。

属	節	種	変種	和名
Primula サクラソウ属	Cortusoides サクラソウ節	P. sieboldii	var. sieboldii	◎サクラソウ
		P. kisoana	var. kisoana var. shikokiana	カッコソウ シコクカッコソウ
		P. jesoana	var. jesoana var. pubescens	◎オオサクラソウ ◎エゾオオサクラソウ
	Reinii コイワザクラ節	P. reinii	var. reinii	コイワザクラ
			var. kitadakensis	クモイコザクラ
			var. myogiensis	ミョウギコザクラ
			var. rhodotricha	チチブイワザクラ
		P. tosaensis	var. tosaensis var. brachycarpa	イワザクラ シナノコザクラ
	Hidakanae テシオコザクラ節	P. takedana	var. takedana	◎テシオコザクラ
		P. hidakana	var. hidakana var. kamuiana	◎ヒダカイワザクラ ◎カムイコザクラ
	Cuneifolia エゾコザクラ節	P. cuneifolia	var. cuneifolia	◎エゾコザクラ
			var. hakusanensis var. heterodonta	ハクサンコザクラ ミチノクコザクラ
		P. nipponica		ヒナザクラ
	Prolifera クリンソウ節	P. Japonica		◎クリンソウ
	Aleuritia ユキワリソウ節	P. modesta	var. modesta	◎ユキワリソウ
			var. fauriei	◎ユキワリコザクラ
			var. samanimontana	◎サマニユキワリ
			var. matsumurae	◎レブンコザクラ
		P. yuparensis		◎ユウバリコザクラ
		P. sorachiana		◎ソラチコザクラ
		P. macrocarpa		ヒメコザクラ

表 1

◎印は北海道に生育しているもの

北海道には14種類が生育している。中でもユキワリソウ節は7種類中6種類が北海道に生育し、そのうち4種類は北海道だけに分布している（異論もある）。

最近私は、どういうわけか、このユキワリソウ類が好きになった。好きになると、とことんその植物のことを知りたくなる。暇に任せて根掘り葉掘り調べて見た。

自分なりに面白いと思うことがいろいろ分かったが、何せ歳も歳、記憶力が最近とみに減退し、勉強した片端から忘れてしまう。

そのようなわけで、ここに書き記して自分のために記録を残しておく。

“ユキワリソウ”という植物が、広く知られるようになったのは、安政3年（1856年）いまの岐阜県大垣の医師飯沼慾斎が出版した、日本で初めての本格的な植物図鑑、『草木図説』に掲載されたのがきっかけであったと思われる。

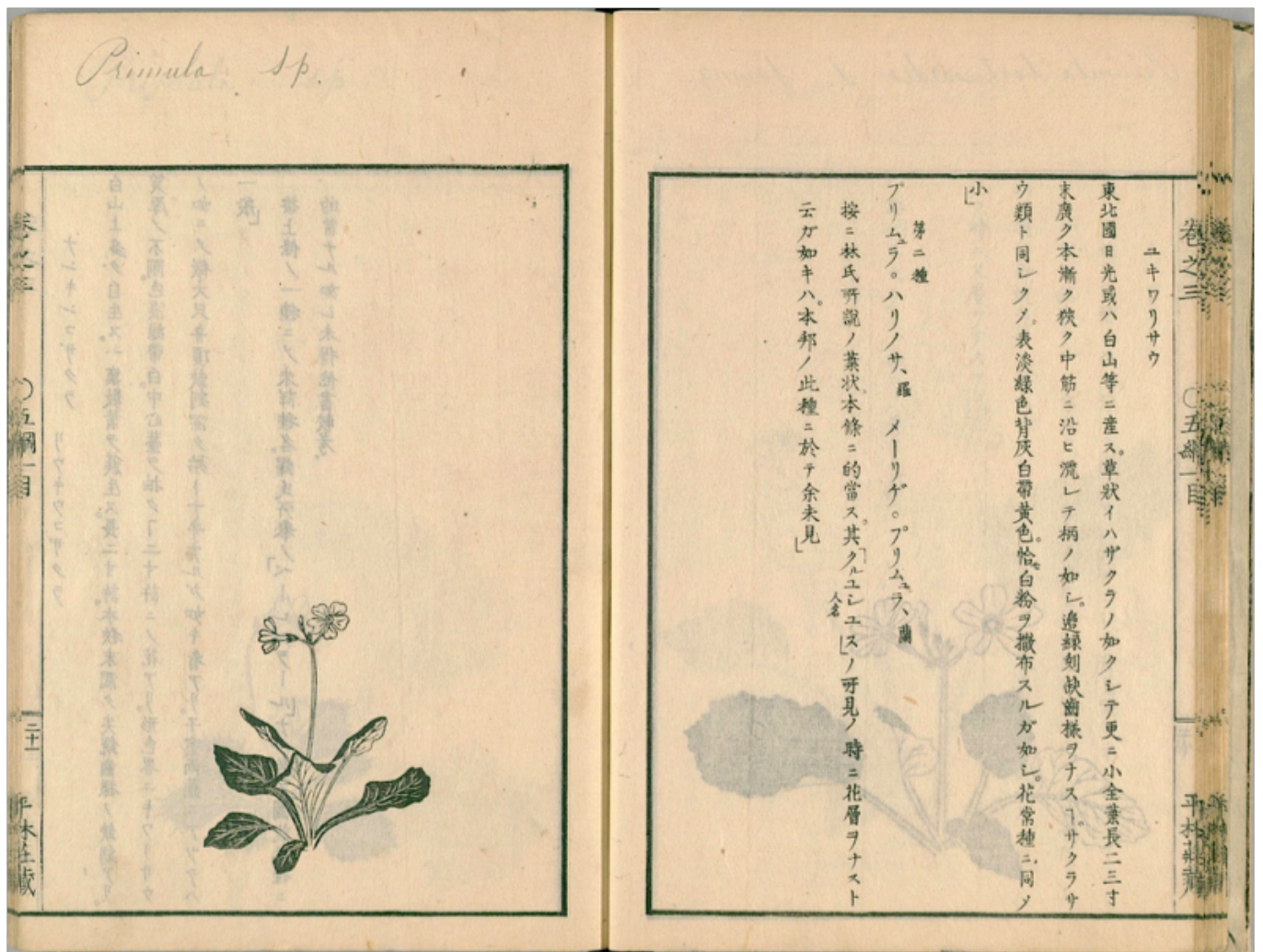


図1 国立国会図書館デジタルコレクション 『草木図説』前編20巻中（3）76コマ中27コマ目
伊藤圭介と孫伊藤篤太郎の蔵書印があるので、書き込みはどちらかと思われる。

飯沼慾斎は若くして福井榕亭に医学を学び、小野蘭山の元で本草学を学んだ。漢方医として成功していたが、期するところあって江戸に出、宇田川玄真に蘭学を学んで大垣に戻り蘭方医としても名声を博した。五十歳にして家督を譲り一念発起植物の研究に没頭し、七十歳で「草木図説」の稿本を完成した。そのうち草部20巻のみが安政3年（1856年）から文久2年（1862



図2 国立国会図書館デジタルコレクション 『草木図説』前編20巻中(3)

年)にかけて出版された。稿本は全て彩色されていたが、出版に際して費用が足りず部分図以外は無彩色とされたという。

『草木図説』とよく比較される岩崎灌園の『本草図譜』天保元年(1830年)は、中国から輸入され日本の本草学の基本書とされた李時珍の『本草綱目』に倣い、そこに書かれている薬草名が日本ではどのような植物に該当するかを図示するのを目的として作られた。従って項目

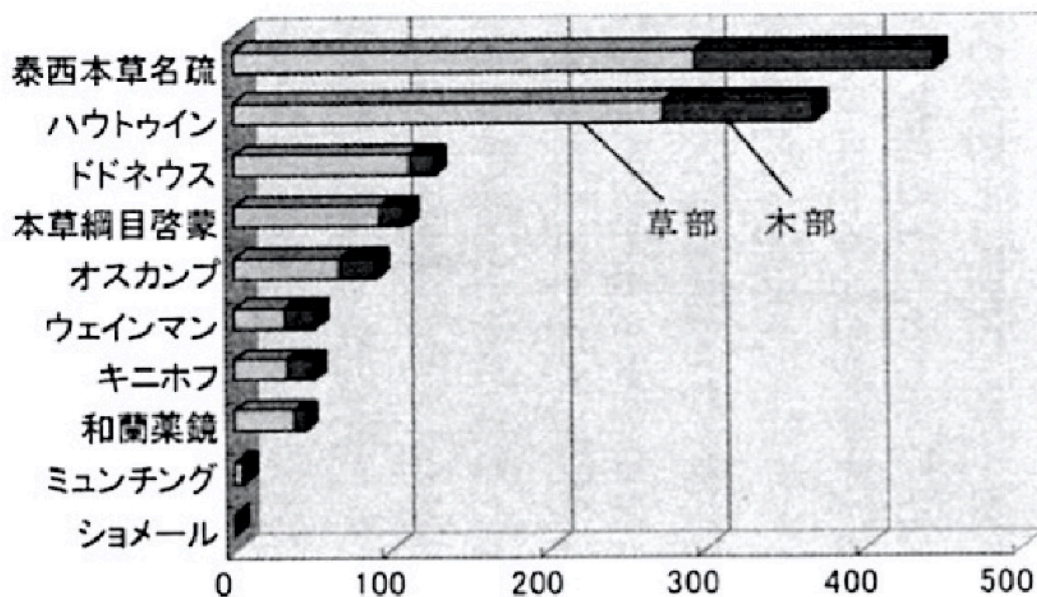
の順番も「本草綱目」に準じ、中国名と和名が書かれ、植物の説明は図中に短く入れられているだけだった。2000種92冊のほとんどは画工を雇って手彩色で作られたため高価で、大名や富裕層しか購入出来ず一般に普及することはなかった。ユキワリソウは入っていない。（後年作られた索引には載っているが、これはミスミソウを指す。）

一方『草木図説』は、本草学から一步進んで純粋に日本に自生する植物を手元に集めてその性状を記載し自ら図を描いた。当時としてはまだ珍しかった顕微鏡も使って花の内部構造を観察しリンネの24綱に基づいて分類し、和名をもってその標名とした。悠斎は伊藤圭介の『泰西本草名疏』によって、植物には国ごとの名前とは別に学名というものが付けられていることを知った。そこで同定が出来たものについては学名とオランダ語名も書き入れた。悠斎74歳から80歳にかけて草部(1205種収載)が出版されたが、木部は生前には出版することが出来なかった。

岩崎灌園も飯沼悠斎も、当時オランダからもたらされたウエインマン（ヴァインマン、ワインマン）の『薬用植物図譜』など、西洋の植物の美しい彩色図譜を見て、大いに感化を受けたであろうけれども、その後に目指した方向は違っていた。

『草木図説』は、リンネ式の配列で植物が並べられているので、サクラソウ属6種がまとめて載せられている。サクラソウ、イワザクラ、ユキワリソウ、ハクサンコザクラ（ナンキンコザクラ）、カッコソウ、クリンソウの順になっている。この他にイワザクラの記述中に別に御岳・蝦夷にオオサクラソウという種があると書かれている。現在は表1で整理したように日本国内に14種が認識されているので、ちょうど半分となる。この時代に大垣という大都市から離れた地の一人の老医者がこれらの植物を全て手元に集め、観察記載したということは率直にすごい事だと思う。

図1 『草木図説』の引用文献の引用度数



悠斎は植物を研究するにあたって西洋の植物学関係の書物を直接入手し、または借用して写本も作っている。左の図は『草木図説』に引用された文献の一覧表であるが、引用の多い順に主なものは以下のようになる。

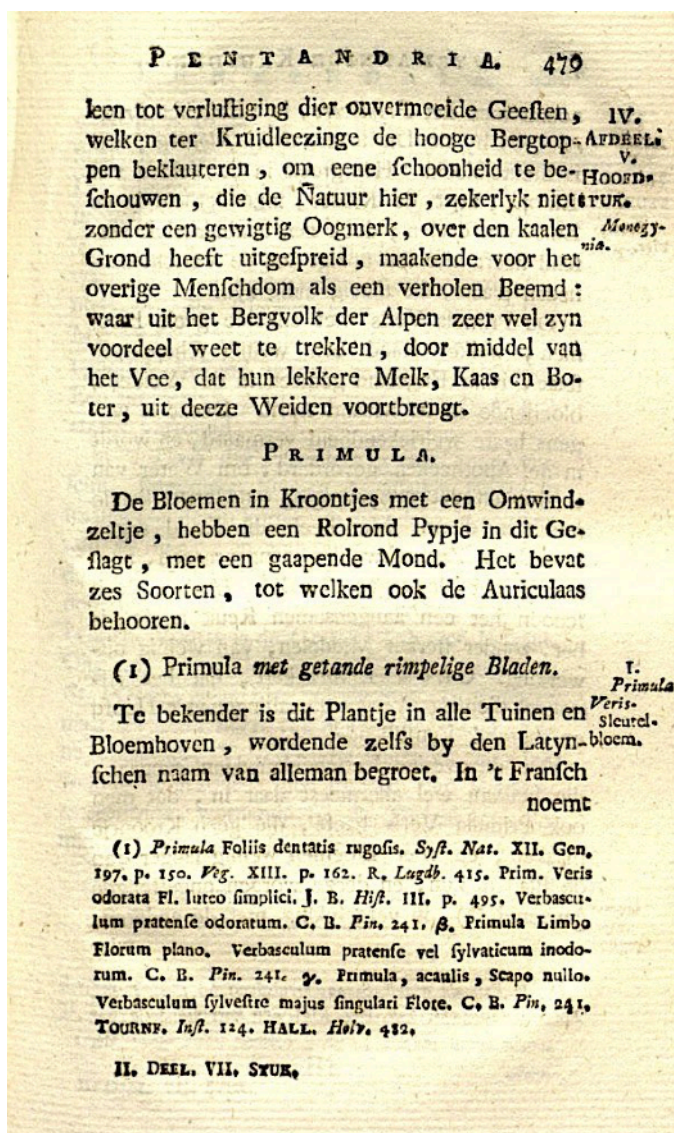
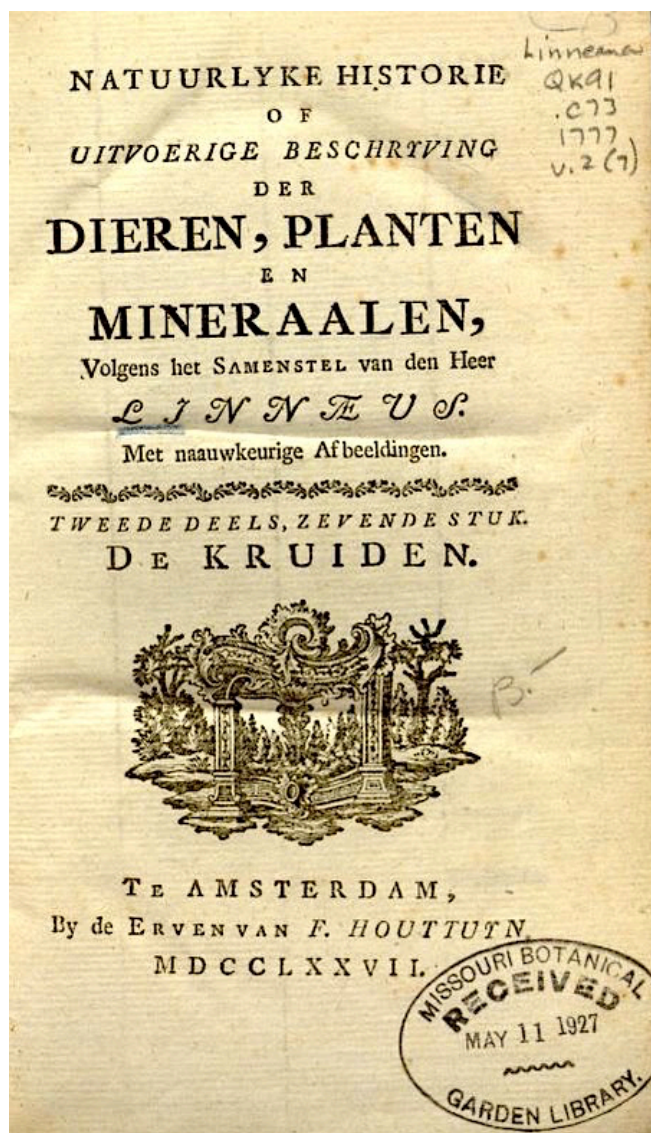
●伊藤圭介『泰西本草名疏』（1829年）、長崎遊学から帰郷する際に師シーボルトから餞別として贈られたツェンベリーの『日本植物誌』“Flora Japonica”を翻訳し、植物の学名をABC順に並べ和名をあてたもの。草部では最多の294ヶ所に引用がある。サクラソウ属はサクラソウ *Primula coltusoides* のみが載っている。春氏として引用されることが多い。

●ハウトゥイン（ホッタイン・ハウトイン）Houttuyn『リンネの自然誌 第二部』“Natuurlyke Historie of uitoerige beschryving der dieren, planten en mineraalen, volgens het samenstel van den heer Linnaeus.”（1777年）。惣斎が『泰西本草名疏』の次に頼りにしたのがこの本。林氏として引用。

●ドドネウスDodonaeus『草木誌』“Cruydt-boeck”（1644年）オランダ語版。最も早くから日本に入ってきた植物学書。同じ大垣の医師で交友のあった江馬活堂所蔵のものを借用。鐸氏として引用。

●オスカンプOskamp『薬用植物図譜』“Afbeelding der Artseny-gewassen met Derzelver Nederduitsche en Latynsche Beschryvingen”（1796～1800年）。写本を所有していたという。

●キニコフKniphof『植物印葉図譜』（1757～1764年）。印葉図とは植物標本の拓本のこと。写本を所有していたという。幾尼法氏などとして引用。



wier Bladen zig als een Roos uitbreiden, en IV. Stengen uitgeeven met zeer sierlyke Kroontjes. ^{AFDEEL. V.} De Bloemen zyn in sommigen dubbeld, of ^{HOOFD-STUK.} steeken als Peperhuisjes in malkander. Voor 't overige is 'er byna geen Kleur te bedenken, waar mede zy niet praalen, hebbende de Tui- <sup>Monogy-
nia.</sup> nierkonst die Kleuren zeer vermenigvuldigd. Munting verhaalt, dat hem meer dan zes- tigderley bekend waren, allen verschillende. Een aanzienlyk getal daar van wordt by WEINMANN vertoond.

In 't Loof der Primulaas is ook eenig verschil. Sommigen hebben de Bladen langer en smaller; anderen korter en breeder: in eenigen zyn zy meer, in anderen minder gerimpeld, doch in 't algemeen zodanig, dat sommigen den naam van *Wollekruide* 'er aan gegeven hebben. Voorts is de Gestalte iedereen bekend. Om wat reden de naam van *Hemelsteutels* en *St. Pieters-Kruid* hier voegen zou, is onzeker: maar *Primula* heeft van het vroeg bloeien zy- ne afleiding. Verscheidene hebben, mooglyk wegens de afkomst, den bynaam van *Constantinopolitana*, wordende by de Turken zeer be- mind en *Carchicheo* geheten.

(2) *Primula met gekartelde gladde Bladen, den Rand der Bloemen plat.*

II. *Primula Farinosa.*
Meelige,
Dus

der den Grond, zou de Bloemsteeltjes in deeze uitgeeven. Ik heb ze wel dicht aan, doch niet onder den Grond gevonden.

(2) *Primula Foliis crenatis glabris, Florem limbo plano.*

II. DEEL. VII. STUK.

Hh

Hort.

IV. Dus wordt de *Primula Veris met roode Bloemen*, welke CLUSIUS in het Land om- ^{AFDEEL. V.} streeks Weenen waarnam, en wegens de fraai- ^{HOOFD-STUK.} heid in 't byzonder afbeeldde, van de anderen afgezonderd. Zy heeft een Stengetje van wel een Span hoog, beladen met een sierlyk Bloem- kroontje, voortkomende uit een Roosje van Bladen, die weinig gerimpeld en van anderen als met Meel beffrooid zyn. Uit de genen, welken hy in den Tuin overgebracht hadt, kreeg CLUSIUS een Plant, welke uit het midden van het Kroontje een ander Kroontje voort- bragt. Te Londen zynde, nu omtrent twee Eeuwen geleeden, verstondt hy, dat deeze Soort overvloedig in de Noordelyke deelen van Engeland, op vogtige Velden groeide, worden- de van de Ingezctenen *Byrdeys*, dat is Vogels- Oogen, genoemd. SIMLERUS heeftze het *Keizertje* of *Koningje* der Kruiden getyteld. In de Velden van Sweeden is zy gemeen, en komt ook voor in Switzerland, Duitschland en in de Zuidelyke deelen van Europa. Hier houdt men- ze als iets raars in de Tuinen.

Deeze Soort kan als een middelflag en over- gang van de Primulaas tot de Auriculaas aange- merkt worden, die niet toelaat dezelve van el- kan.

II. Cliff. Fl. Suec. &c. &c. Prim. Flor. erectis fastigiatis. Fl. Lapp. 79. Primula Veris rubro flore. CLUS. Penn. p. 340. Verbasculum umb. Alp. minus. C. B. Pin. 242. GOUAN. Monsp. 88.

BHL (Biodiversity Heritage Library) より Houttuyn "Natuurlyke Historie"

●ウエインマン (ワインマン) Weinmann 『薬用植物図譜』 (1736~1748年)。西村広休から借用。

上図はハウトゥイン『リンネの自然誌 第二部』。左上が表紙、その右から479~482p.を順に並べてある。(1) *Primula Veris*、(2) *Primula Farinosa*・Meelige、以下486ページまで(3) *Primula Auricula*・Beeren-Oor、(4) *Primula minima*、(5) *Primula Cortusoides*・Gekwabde、(6) *Primula Integrifolia*、と6種の*Primula*が記載されている。

(2) (3) (5)の種小名の後に付けた語はオランダ語名。

悠斎はこの書を元にして、ユキワリソウには第二種・プリムユラ・ハリノサ(羅)メーリゲ・プリムユラ(蘭)、クリンソウには第三種・プリムラ・アユリキュラ(羅)ベーレンオール(蘭)、サクラソウには第五種・プリムユラ・コルトユソイデス(羅)ゲカッフデ・プリムユラ(蘭)をあてた。

悠斎の「ユキワリソウ」の記載文を現代文に直してみる。

「ユキワリソウ

東北国日光或いは白山等に産す。草状イワザクラの如くして更に小、全葉長二三寸、末広く元漸く狭く中筋に沿い流れて柄の如し。辺縁刻欠歯様をなすことサクラソウ類と同じくして、表淡緑色背灰白を帯びた黄色。白粉を撒布するが如し。花常種に同じくして小。

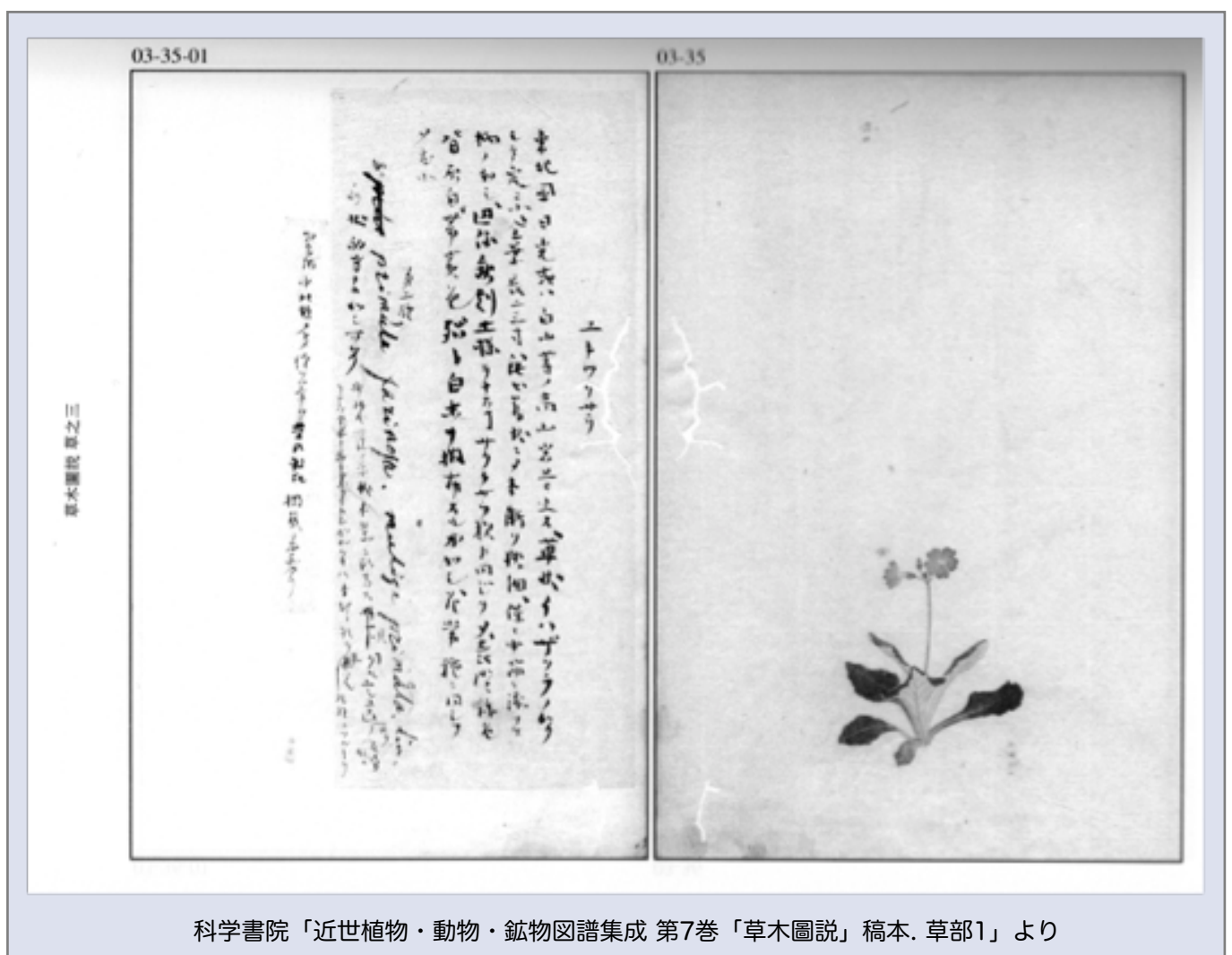
第二種

プリムラ・ハリノサ（羅）メーリゲ・プリムユラ（蘭）

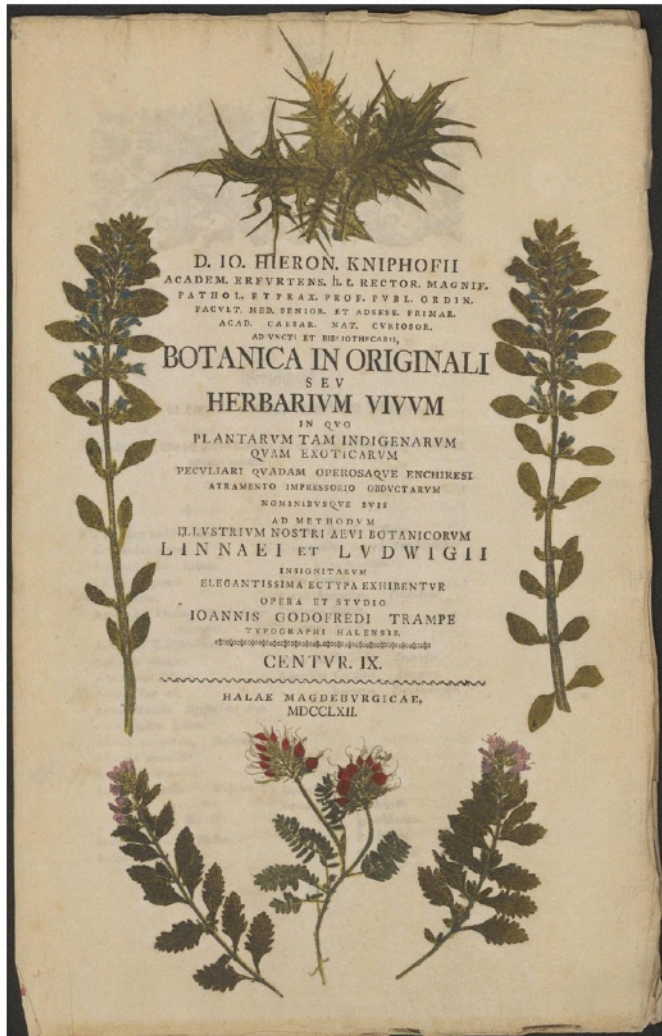
按ずるに林氏所説の葉状本條に的当す。其の「クルユシユス」（人名）の所見の時に花層をなすと言うが如きは、本邦の此の種に於いて余未見。」

「林氏所説の葉状」というのはハウトゥインの2番目の種Primula Farinosa・Meeligeの「Primula met gekartelde gladde Bladen, den Rand der Bloemen plat.」の「葉は無毛で円鋸歯を持つ」という部分と「Farinosa」という種小名の意味「粉をふいた」を合わせて、「本條に的当す」としたのだと思われる。

「其の「クルユシユス」の所見の時に花層をなすと言う」これはハウトゥインの解説文中の「Clusius een Plant, welke uit het midden van het Kroontje een ander Kroontje voortbragt.」というClusiusによる見聞を指している。



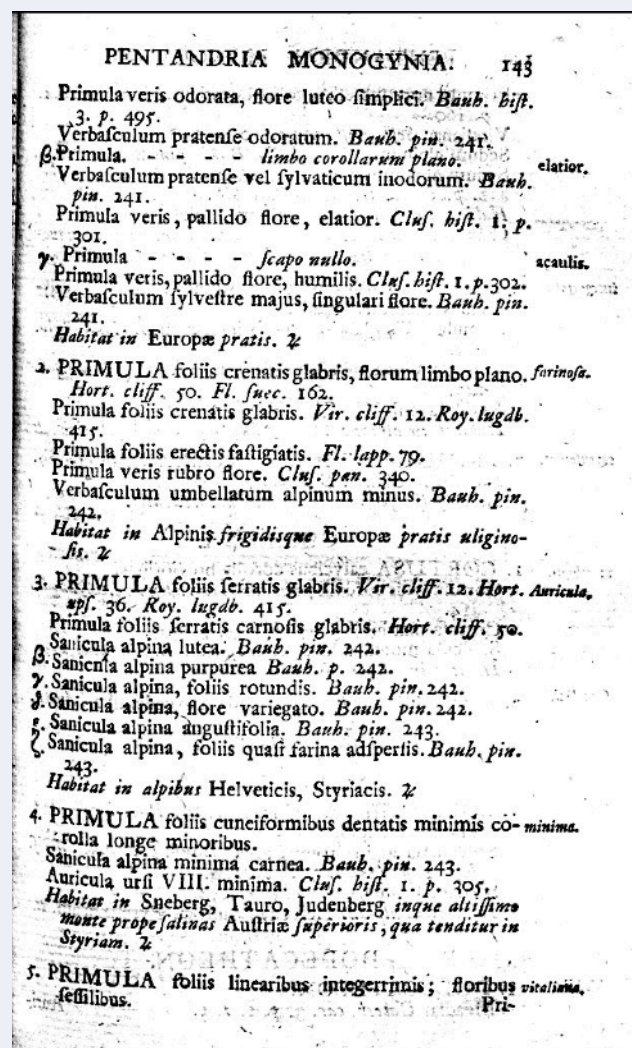
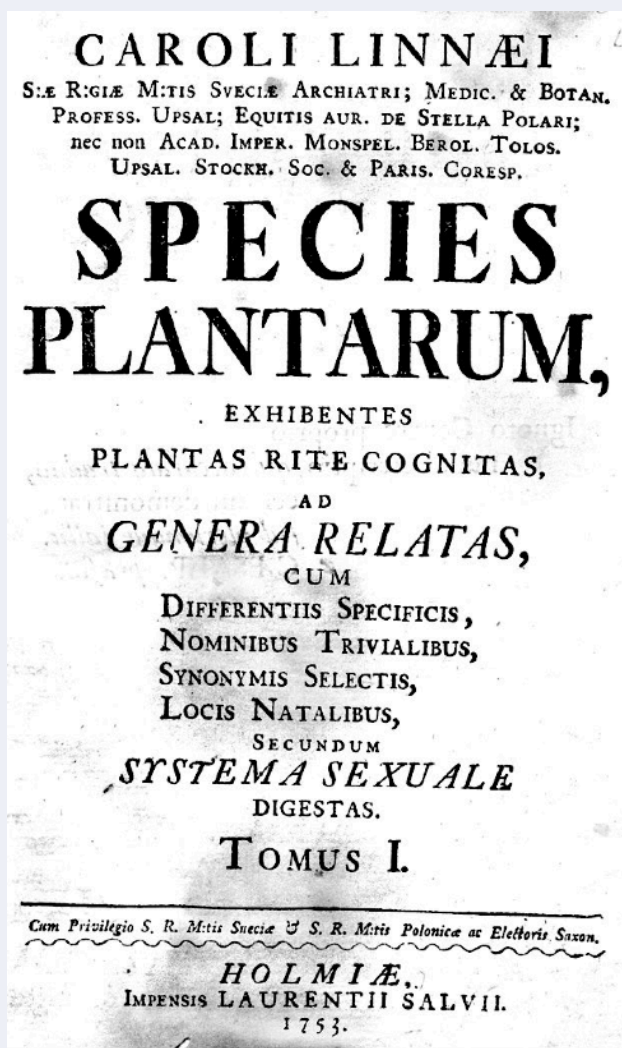
上図は昭和32年（1957年）になってその存在が明らかにされた「草木図説遺稿」の中のユキワリソウの部分。植物図は全て美しく彩色されているというが、残念ながらこの本ではグラビアを除いてモノクロ化されている。記載部分も解像度が悪く完全には判読出来ないが、刊本との大きな違いは見られないようだ。学名以下の部分が *primula farinosa*・meeligeとラテン語とオランダ語で書かれていたが、刊本では全てカタカナに置き換えられた。



BHLより Kniphof『植物印葉図譜』“Botanica in originali, seu, Herbarium vivum”

慾斎がユキワリソウを *Primula farinosa* と同定するに当たって、最も参考になった書物がキニコフの『植物印葉図譜』であっただろうと思われる。印葉図とは植物の標本にインクを付けて写し取るもので、実物そのままの姿が印刷されている。キニコフの図譜の *farinosa* はユキワリソウに比べて茎がかなり延びてはいるが、慾斎はハウトゥインの記述と合わせて、これは日本のものと同一の植物だと確信したのだと思う。（上図）

ちなみに、*Primula farinosa* という学名が初めて用いられたのは、キニコフから遡ること3年、1753年のリンネ（Caroli Linnaei）による『植物の種』“*Species plantarum*”において、143ページに、*Primula* 属の2番目の種として記載された。キニコフの『植物印葉図譜』*Primula farinosa* の図の下に書かれている言葉は、リンネの記載そのままである。



BHLより Linnaei『植物の種』“Species plantarum”（1753年）

2. PRIMULA foliis crenatis glabris, florum limbo plano. *farinosa*

なお植物の学名はリンネの『植物の種』“Species plantarum”（1753年）を出発点とすることが決められ、以来現在まで学名の基準として引き継がれている。（上図）

安政3年から文久2年（1856年～1862年）にかけて出版された『草木図説』は、その後明治8年（1875年）に第二版が田中芳男・小野職愨 訂補『新訂草木図説』草部20巻として出版された。（下図）田中芳男は伊藤圭介の弟子であり、小野職愨は飯沼慾斎の師の小野蘭山の孫に当たる。

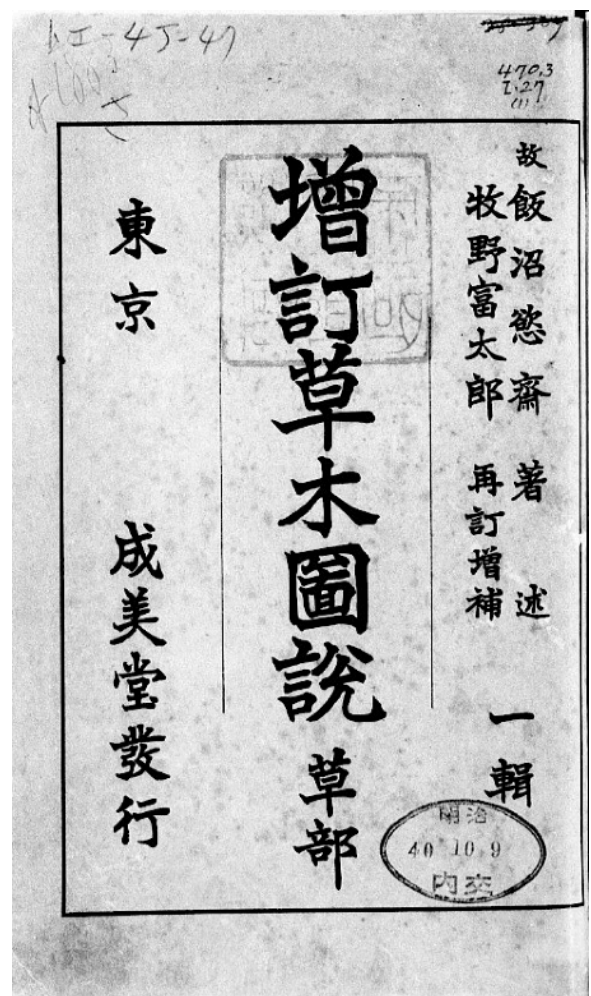
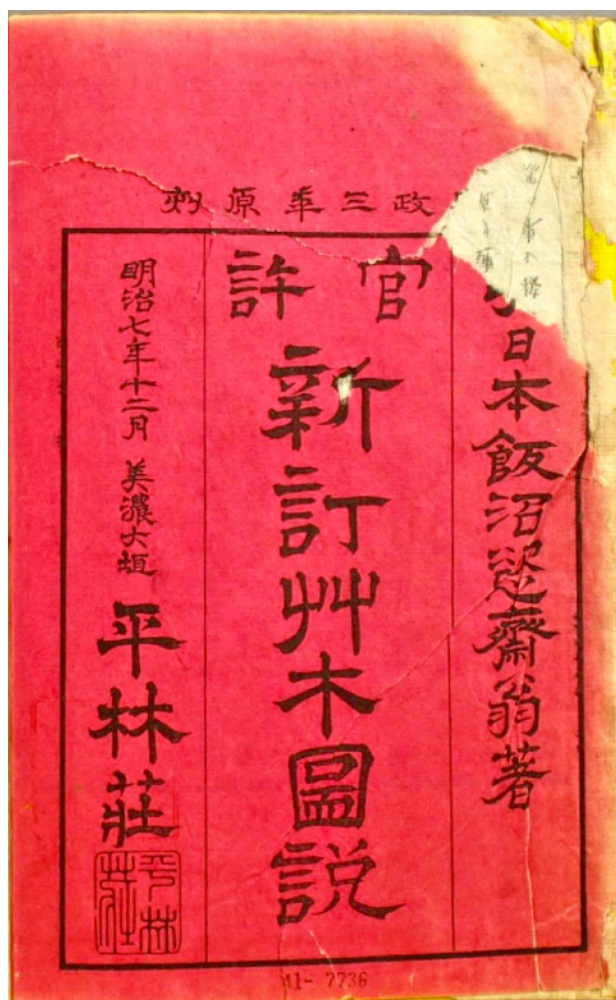
さらに時代が下って明治40年から大正2年（1907年～1913年）にかけて、牧野富太郎が解説と図を加えて洋装版の図鑑、再訂増補『増訂草木図説 草部』4冊が出版された。（下図）

飯沼慾齋生誕二百年記念誌『飯沼慾齋』の中で、これらの本について二人の植物学者が、述べられておられる。

「明治10年東京大学が創立され、はじめて植物学が専攻されるようになったとき、教室の書棚にあってもっとも用いられたのは田中芳男、小野職愨校訂、飯沼慾齋の「草木図説」とフランシェ・サヴァチェの「日本植物名彙」であり、共に明治8年の刊行であった。」（木村陽二郎「ナチュラリスト・飯沼慾齋」）

「この牧野版といわれる第三版は、慾齋の本文のあとに補として牧野博士の加筆があり、学名も当時の牧野の見解によるものを掲げ、解剖図も多くが牧野の手によって書き足してある。そうしてこれは、牧野図鑑が昭和15年（1940）に世に出るまで、約半世紀の間日本の植物を学ぶ者にとって唯一のたよりであった、といっても過言ではない程の役割をはたした著作である。」（村田源「飯沼慾齋の植物画について」）

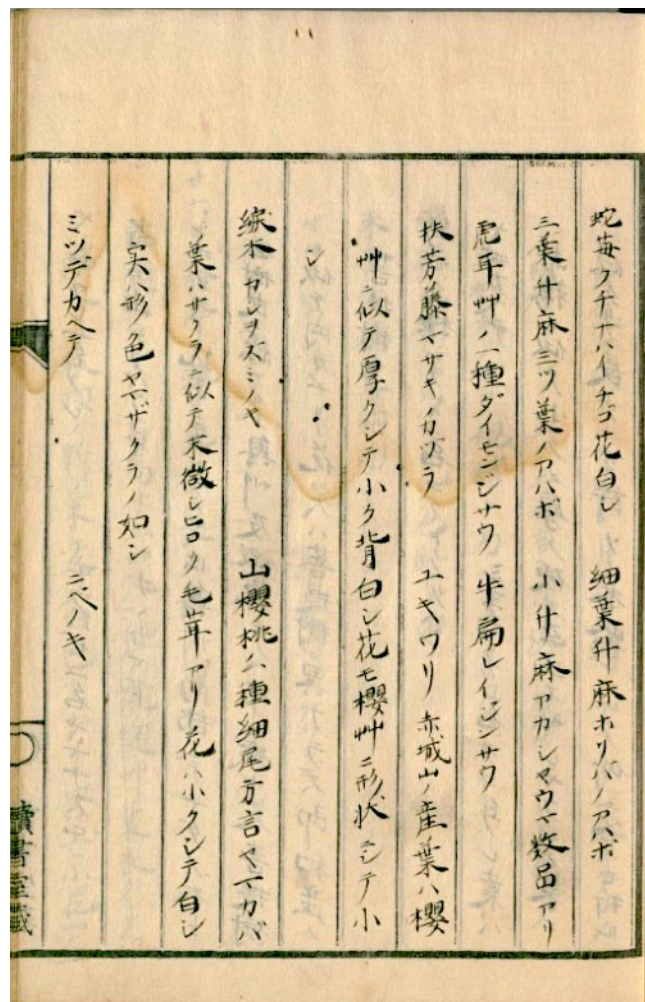
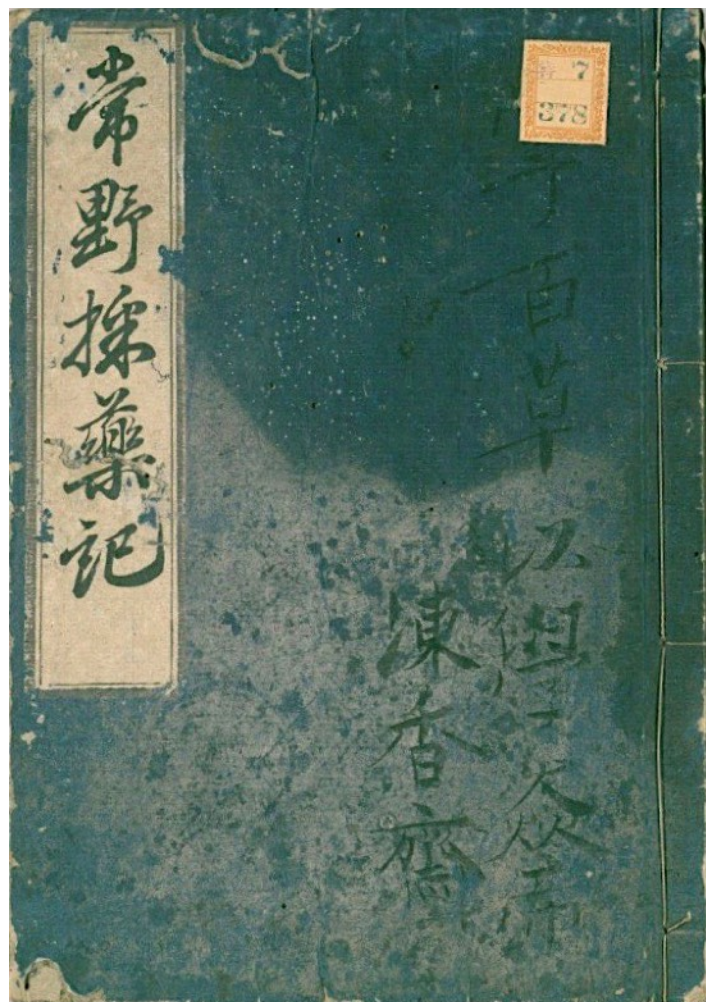
明治維新まであと12年という江戸時代末期に出版された日本初の本格的な図鑑『草木図説』。そこに描かれたユキワリソウという植物が徐々に世の中に認知されてゆくわけであるが、



国立国会図書館デジタルコレクションより

そもそもユキワリソウという植物が存在するということはいつごろから知られていたのだろうか。

慶応大学の磯野直秀さんが「資料別・草木名初見リスト」というのを作っておられる。たくさん古い文献から植物名をリストアップしてデータベース化した労作だ。サクラソウ属でリ



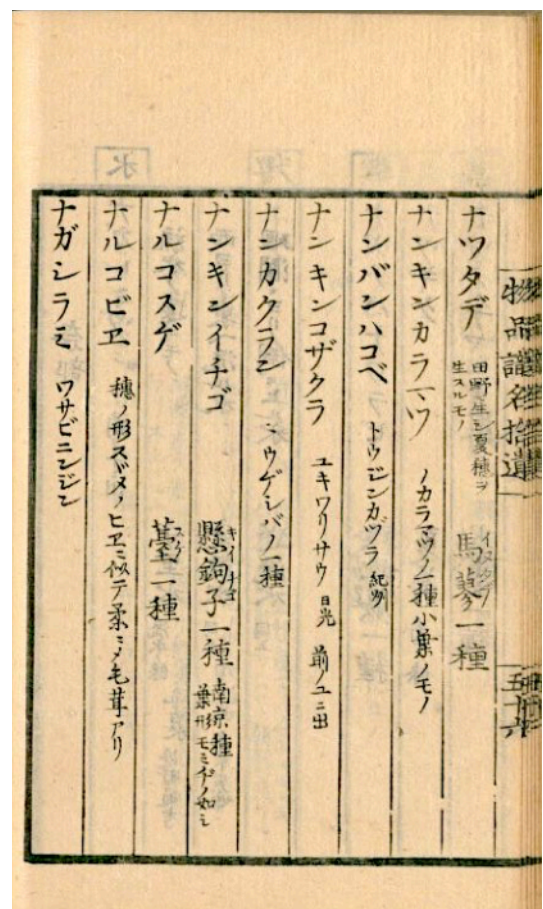
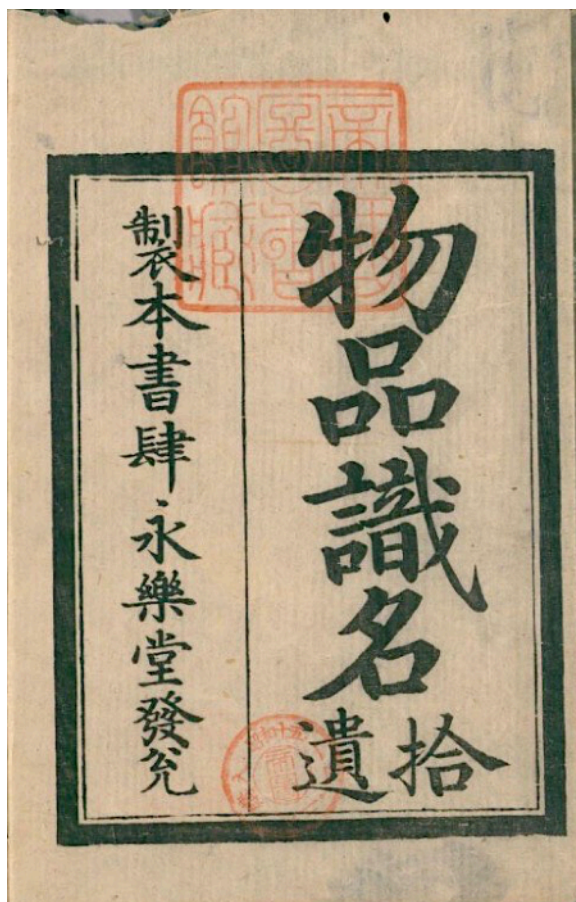
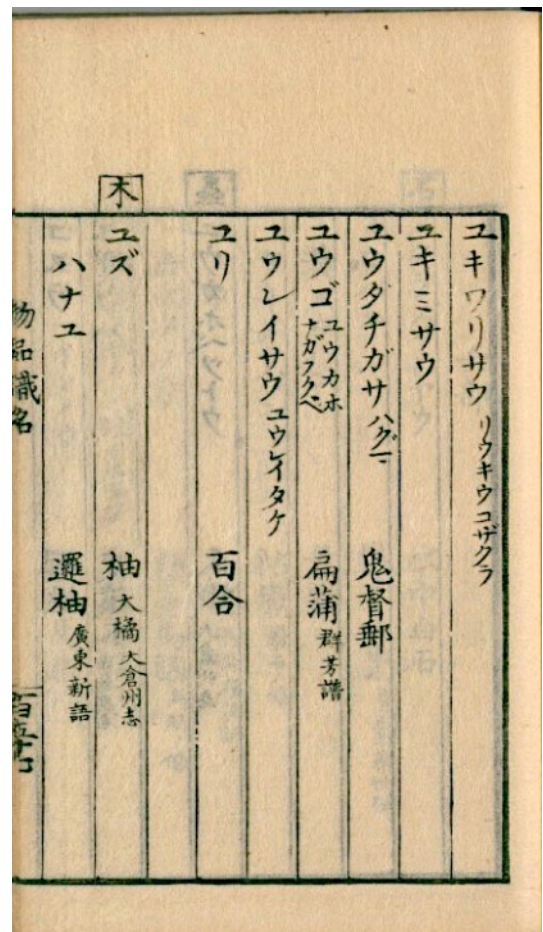
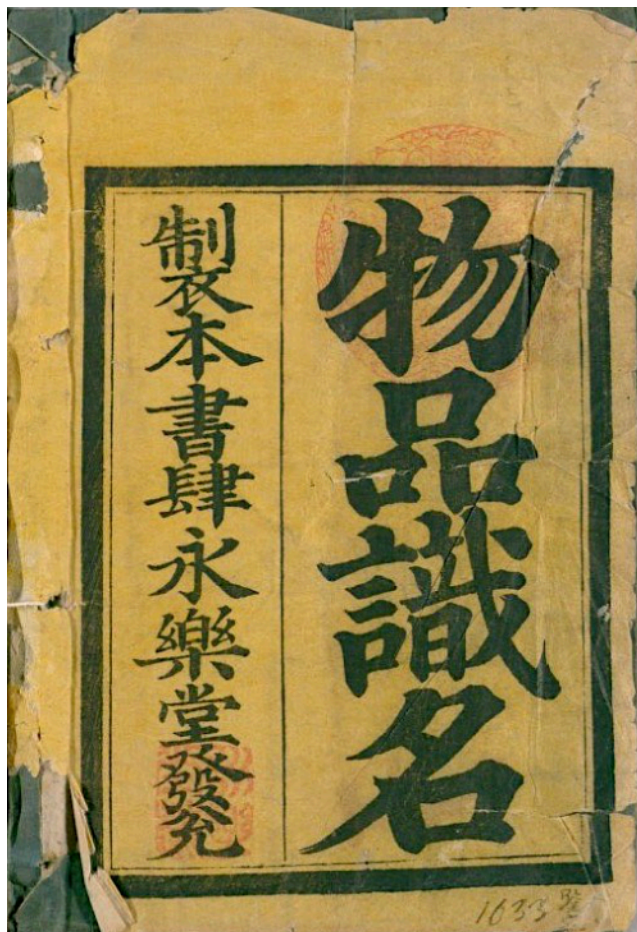
国立国会図書館デジタルコレクションより

ストップされたのはサクラソウとユキワリソウ。サクラソウはさすがに古く室町時代の記録が残されているが、ユキワリソウの方は小野蘭山の『常野採薬記』（1801年）が最初であった。（上図）

小野蘭山は京都の人。私塾を開いて本草学を教えることを生業とした。弟子の数は千人とも言われ、水谷豊文をはじめ、杉田玄伯、山本亡羊、飯沼慾斎、岩崎灌園などが輩出した。1799年、71歳の時に幕府の医官に任用され江戸に下る。そして早速にも幕命により各地に五回の薬草採集旅行を命じられる。その第一回目が筑波・日光などを巡る41日間の旅行で、門弟や従者など15人が付き従ったという。その時の報告書が『常野採薬記』（じょうやさいやくき）である（常野というのは常州・野州のこと）。

「常野採薬記」には写本や、あるいは付き従った門弟が書き取った採薬記そしてその写本とさまざまなバージョンがあるが、上図はその一つ。日光での記録の部分。蘭山の採薬旅行は、訪問先に前触れが出され、また現地では案内人も付く。この「ユキワリ」の記録は案内人が事前に採集したものを蘭山に見せ、鑑定して貰ったのものではなかろうか。蘭山はこれがユキワリソウという植物であることを言い当てた。以前からユキワリソウという植物を知っていたわけであるが、それより古い資料は見当たらない。

蘭山が江戸に去った後、その学統を継いだのが水谷豊文。尾張藩の御薬園御用となり、名古屋の嘗百社という本草学研究会を主催した。会員には伊藤圭介やその兄大河内存眞、吉田高憲、



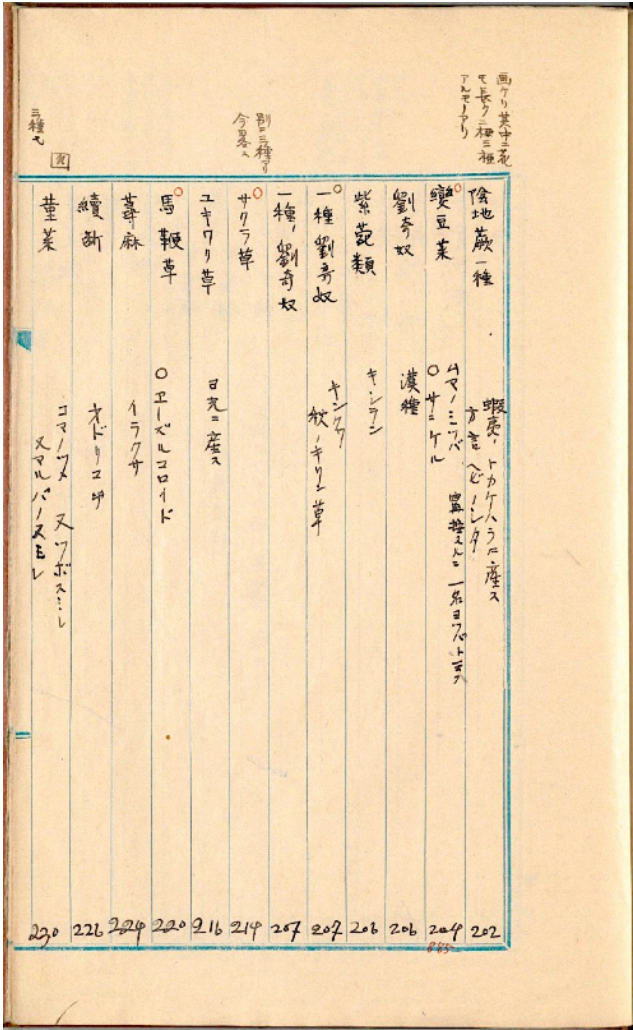
大窪昌章らがいた。豊文は多くの著作を残したが、なかでも文化6年（1809年）4000種の動物・植物・鉱物の和漢名を対照した『物品識名』2冊と文政8年（1825年）に刊行した続編『物品識名拾遺』2冊が有名。いわば本草学辞典ともいえるべきもので、当時広く愛用されたという。

豊文は『物品識名』において、ユキワリソウの別名にリウキウコザクラと書き込んでいる。また『物品識名拾遺』では、ナンキンコザクラの別名がユキワリソウであるとしている。つまりこれらの3つの植物名はおなじものとした。しかし、実際は慾斎の『草木図説』のナンキンコザクラの記載にもあるように、別名がリウキウコザクラであり、「白山上多ク自生ス」と書かれ、図もこれはハクサンコザクラである。この時点ではそれらが混同されていたらしい。（牧野新日本植物図鑑によればナンキンとは遠来の珍品としてこの名前を与えたもので南京とは関係がないと書いている。他にナンキンナナカマドの項にもナンキンとは小型のものに付ける形容詞で外来を意味しないとある。『物品識名拾遺』にもいくつか例がある。また、リウキウコザクラがナンキンコザクラの別名となっている理由は分からない。現在のリュウキュウコザクラはサクラソウ属ではなく、ハクサンコザクラとは全く似ていない。）

『物品識名拾遺』にユキワリソウが日光にあると書かれている。これは『常野採薬記』の知見が盛り込まれたものであろう。



BHLより “Cruydt-boeck”

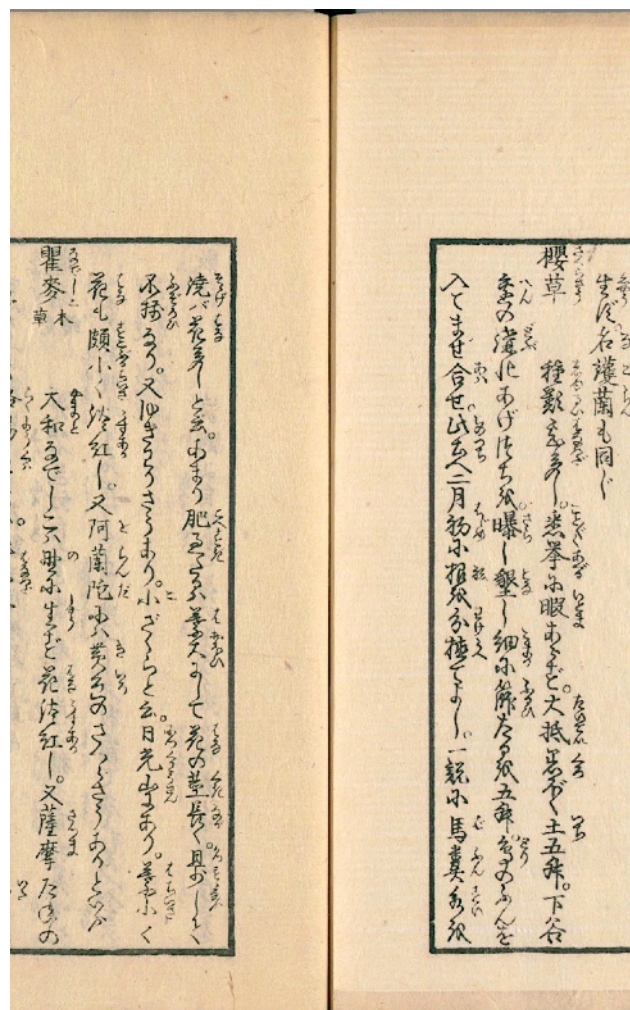


国立デジタルより 『遠西鐸度涅槃私物品考名疏』
1914年白井秀雄写本

飯沼慾斎の蘭学の師は宇田川玄真であるが、玄真の養子が宇田川榕庵。慾斎の三男は後に榕庵の養子となり興斎を名乗る。宇田川家は蘭学の名門として名高い。榕庵は後年『菩多尼訶経』や『植学啓原』を著して西洋植物学を初めて日本に紹介したが、文化十二年（1815年）には『遠西鐸度涅烏私物品考名疏』を著している。これはドドネウス『草木誌』“Cruydt-boeck”（1644年）に書かれた植物が日本の何という植物にあたるか一覧表にした、いわば日本語による索引。（上図）

ここにも「ユキワリソウ 日光に産す」とある。下方の216という数字はドドネウスの『草木誌』のページを表しているが、そこに図入りで解説されているのは後にリンネによって *Primula Auricula* とされたもので、図は似てはいるが違っている。ドドネウスのこの本には *Primula farinosa* はまだ載っていない。

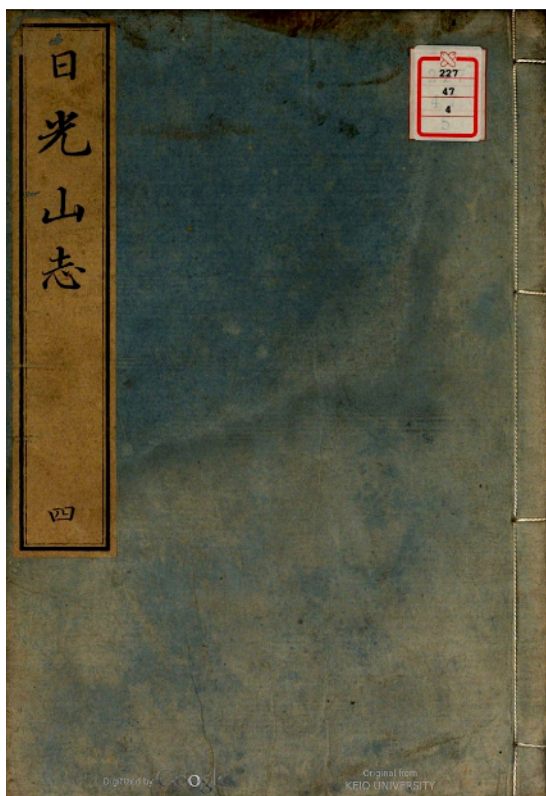
岩崎灌園は飯沼慾斎より四歳若いがほぼ同時代の人である。江戸幕府に仕える身分の低い武士ながら本草学に秀でていることが認められ、薬種植場を貸与され、そこで各地から採取してきた薬草を育てていた。それで号を灌園という。『本草図譜』に取りかかる前の文化15年（1818年）、今で言う園芸書、『草木育種』（そうもくそだてぐさ）を出版した。桜草の育てるのに「土に鳥の糞を混ぜて良し、馬糞水を注げば花多し」などと述べた後に、「また、ユキワリソウあり、小ザクラと云う、日光山にあり、葉小さく花も頗る小さく淡紅」する。と書いている。（下図）





国立国会図書館デジタルコレクションより

また文政7年（1824年）には『日光山草木之図』（全8巻）を著して幕府に献上した。日光山一帯から採取し、江戸で培養した珍しい草木二百数十種を描いたもので、今風に言えば一地域の植物写真集のようなものか。岩ザクラとあるのがユキワリソウで、彩色された図はこれが最初かも知れない。（上図）



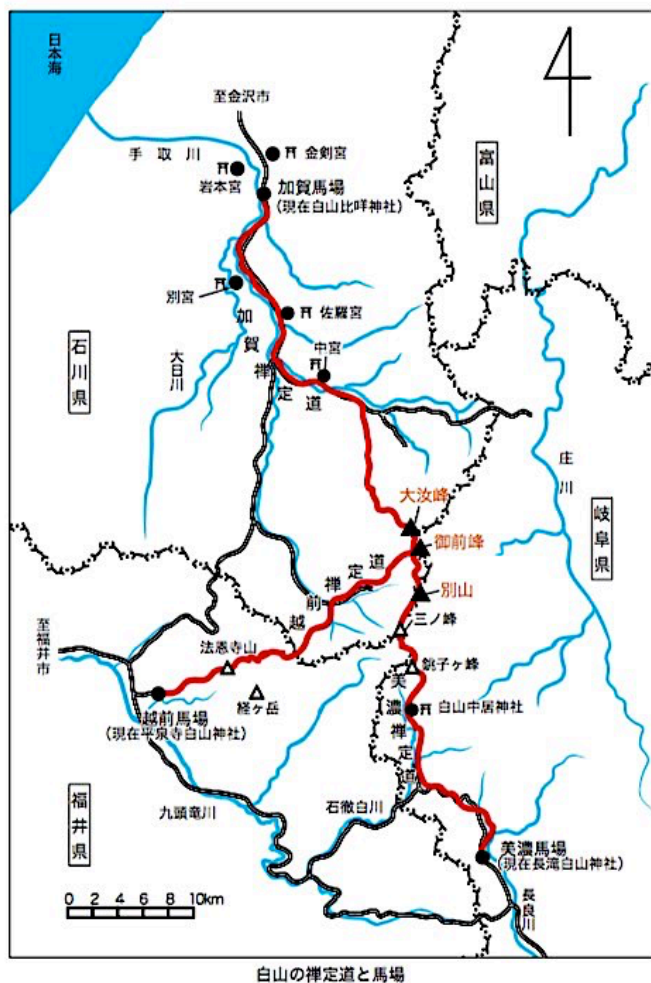
HathiTrust's digital libraryより

江戸時代の日光山には二荒山神社、東照宮、輪王寺の二社一寺があり、門前町として発達していた。日光街道の各宿場も整備され、いわば庶民の観光旅行として日光東照宮に参詣する「日光詣」でにぎわった。天保時代には年間数万人の参詣者があったという。天保8年（1837年）には植田孟縉編輯の『日光山志』のような言わば観光案内書のような本も出版されて版を重ねていた。この本にもユキワリソウが図入りで紹介された。（上図）

天保14年（1843年）将軍家慶による東照宮参詣が67年ぶりに行われた。日光出発の日、家慶は松原町下まで歩き、軒を連ねる植木屋に立ち寄って石植雪割草やこけ桃を買い求めたという。江戸時代平和が続き庶民の間にも園芸が盛んになった。ユキワリソウは日光参詣の土産品にもなっていた。

ここで再び話題を飯沼慾斎に戻す。安政3年（1856年）の『草木図説』でユキワリソウの記載に「東北国日光或いは白山等に産す。」と書いた。遠藤正治・北村二郎・水野瑞夫「飯沼慾斎の生涯」によれば、記載に産地が記されているのは極少ないという。稿本の分析によれば、その中で最も記載例が多いのは伊吹山で次が白山とある。慾斎は弘化2年（1845年）7月下旬に白山に最初で最後の採集旅行を行っている。その時にはたしてユキワリソウを見つけたのであろうか。

古池博さんの「白山亜高山帯・高山帯の植物と「いしかわレッドデータブック<植物編> 2010」によると白山中心部に分布しない植



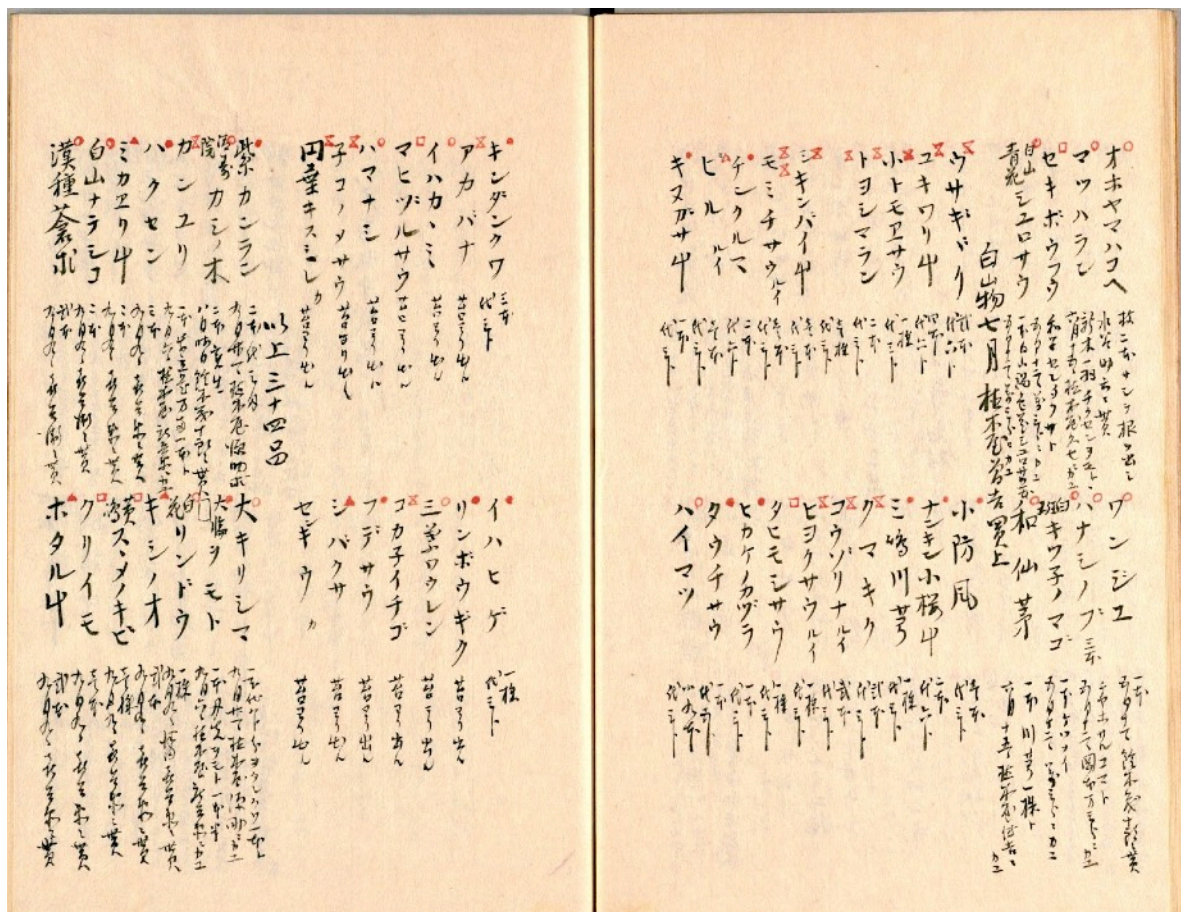
石川県白山自然保護センター「白山の禅定道」より

物(周辺部にのみ分布)の一つとしてユキワリソウが挙げられ、絶滅危惧植物に該当しているのだそうだ。

福原裕子・邑田仁・水野瑞夫「飯沼慾斎植物資料拾遺」によれば、慾斎は訳1700点の腊葉標本を遺し、その内1355点は国立科学博物館に収蔵されているという。『飯沼慾斎』にはその全リストが載っている。その中にユキワリソウの一枚もある。残念ながらこれには日付や産地などの記載は無い。また慾斎の標本は科博のサイトでも公開されていない。

白山は古く平安時代に泰澄大師によって開山されて以来、修験道の山として登られ、山をとりまく越前・加賀・美濃の三国から山頂へと至る三本の道が禅定道（ぜんじょうどう）として整備された。主に東海地方の人が登る美濃禅定道などは、かつては「上り千人、下り千人」といわれるほど多くの来訪者を集めたと言われている。やがて江戸時代になると一般庶民が苦行を伴う旅の一つとして案内人を雇って山に登るということも行われるようになった。

大垣に住む慾斎もこの美濃禅定道を往復したと思われるが、この道沿いにユキワリソウは見ることには出来ない。



慾斎は白山行の三ヶ月後、同じ小野蘭山門下で五つ年上、当時京都の本草学の中心的存在であった山本亡羊に標本を送って鑑定を依頼している。その一枚、ナンキンコザクラの腊葉に二人の問答が書き込まれている。「或云ナンキンコザクラト、然トモナンキンコザクラハユキワリソウノ一ト聞クイカン」「ナンキンコザクラ」

或は云うというのは花戸（植木屋）小栗曾吉の言葉で、花戸はこれをナンキンコザクラと言っている、ナンキンコザクラはユキワリソウの別名と聞くけれどどうか」「ナンキンコザクラで良し」と亡羊が答えている。慾斎は水谷豊文の『物品識名』の記述に、この時点ではまだ影響を受けていたのかも知れない。

植木屋曾吉はWikipediaにも項目がある。名古屋の植木屋で「各地に採薬に出かけて嘗百社中に植物見本を提供し、尾張本草学の発展に貢献した。」とある。特に白山には13回も登山したという。

大垣と名古屋は近い。慾斎は『草木図説』執筆中の不明を明らかにするために名古屋に赴き、嘗百社の重鎮吉田高憲に教えを乞うていた。また嘗百社の採薬旅行に一緒に参加することもあった。

嘗百社の大窪昌章が著した『草本集』巻2には天保元年（1830年）曾吉から白山物のユキワリソウなどを買上げたという記述もある。（上図）

おそらく慾斎も曾吉から白山のユキワリソウを購入して育て、図を描いたのではなかろうか。

参考資料

（資料名 著者 出版社 出版年 論文名 執筆者 その他の順）

飯沼慾斎 飯沼慾斎生誕二百年記念誌編集委員会 飯沼慾斎生誕二百年記念事業会 1984 序文 北村四郎

飯沼慾斎の生涯 遠藤正治・北村二郎・水野瑞夫

『草木図説』の序文解説 矢部一郎

ナチュラリスト・飯沼慾斎 木村陽二郎

飯沼慾斎と岩崎灌園 北村四郎

飯沼慾斎と楊柳 木村有香

飯沼慾斎制作標本寸描 山崎敬

慾斎遺稿の穀、菜、果 湯浅浩史

飯沼慾斎遺稿にみられるコケ植物 高木典雄・川瀬仙吉

『草木図説』に図示されたタイレンサイに就ての一考察 奥山春季

飯沼慾斎植物資料拾遺 福原裕子・邑田仁・水野瑞夫

飯沼慾斎の足跡と採録植物の現況考察 井波一雄

飯沼慾斎の植物画について 村田源

飯沼慾斎と近代植物学 岩槻邦男

飯沼慾斎—医学と人— 青木一郎

飯沼慾斎とオランダ語 斎藤信

『本草千種』と「山吉文庫」をめぐる蘭方医たち 片桐一男

飯沼慾斎と伊勢本草学 松島博

尾張本草学と飯沼慾斎 吉川芳秋

飯沼慾斎と『大黃私考』 安江政一

飯沼慾斎『草木図説』中の生薬記文雑感 米田該典

慾斎の化学質疑をめぐって 宗田一・末中哲夫

『舎密便覧』と『定量試礦撰要』について 千野光芳

『草木図説』執筆記の飯沼慾齋 遠藤正治

飯沼慾齋の三男宇田川興齋について 木村岩治

慾齋九々の書私按 矢野貫一

慾齋の茶道書『雑筆記』について 福原裕子

平林荘と長松の吉田家 川瀬仙吉・田中俊弘

藤井方亭について 茅原弘

飯沼慾齋著作所在目録

平林荘所蔵諸品目録

国立科学博物館所蔵飯沼慾齋腊葉目録

西村・飯沼・小島家略系図

飯沼慾齋年譜

編集後記

霊峰白山 北國新聞社編集局 北國新聞社 2004

海を渡った白山信仰 前田速夫 現代書館 2013

花の沫—植物学者サヴァチェの生涯 竹中祐典 八坂書房 2013

本草綱目啓蒙 小野蘭山 平凡社 1991

日本植物研究の歴史—小石川植物園300年の歩み 大場秀章 東京大学総合研究博物館 1996

博物学の世界 上野益三 八坂書房 1990

日本植物誌—シーボルト『フローラ・ヤポニカ』 木村陽二郎・大場秀章 八坂書房 2000

江戸の本草—薬物学と博物学— 矢部一郎 サイエンス社 1984

博物学の時代 上野益三 八坂書房 1990

江戸の博物学者たち 杉本つとむ 講談社 2006

日本奥地紀行 イザベラ・バード 平凡社 2000

伊藤圭介 杉本勲 吉川弘文館 1960

ナチュラリストの系譜 木村陽二郎 中央公論社 1983

加賀白山 林正一 日地出版 1995

新版 北海道の高山植物 梅沢俊 北海道新聞社 2009

植物学ラテン語辞典 豊国秀夫 至文堂 1987

増訂新版 羅和辞典 田中秀央 研究社 1952

改訂新版 日本の野生植物 4 大橋広好・門田裕一・邑田仁・米倉浩司・木原浩 平凡社 2017 サクラソウ科 高橋英樹

江戸の植物学 大場秀章 東京大学出版会 1997

江戸期のナチュラリスト 木村陽二郎 朝日新聞社 1988

日本自然誌の成立—蘭学と本草学 木村陽二郎 中央公論社 1974

日本の固有植物 加藤雅啓・海老原淳 東海大学出版会 2011

日本高山植物図譜 奥山春季 誠文堂新光社 1966

世界のプリムラ 世界のプリムラ編集委員会 誠文堂新光社 2007 ヨーロッパのプリムラ原種

日本産のサクラソウ属 山口聰

「はくさん」第38巻第3号 石川県白山自然保護センター 2010 白山亜高山帯・高山帯の植物と「いしかわレッドデータブック <植物編> 20 古池博

大場秀章著作選Ⅰ植物学史・植物文化史 大場秀章 八坂書房 2006

白山草木志 畔田翠山 国立国会図書館デジタルコレクション

石川県天然記念物調査報告. 第3輯 1932 国立国会図書館デジタルコレクション

植物学雑誌13 巻150号 1899加州白山及其附近採集植物目録(1・2・3) 市村塘 pdf

「はくさん」第19巻第4号 1992 白山の植物によせて 清水建美 pdf

植物学雑誌78 巻923号 1965 立山, 白山の高山帯高茎草原, ホソバトリカブト=タテヤマアザミ群集について鈴木時夫・中野保正 pdf

金沢大学理学部付属植物園年報(3・4・6) 1970~1972 白山の植物目録(1・2・3) 橋本光政・里見信生 pdf

金沢大学理学部付属植物園年報16 1993 白山植物目録補遺(1) 栗原智昭・米山競一・清水建美 pdf

山梨英和短期大学紀要30 1996 江戸時代の山岳紀行 住谷雄幸 pdf

名古屋女学院短期大学紀要 7 1961 白山における植物の生態学的研究 田村幸子, 西田恵子 pdf

生態環境研究 15 2008 白山の高山および亜高山植生の植物社会学的研究 鈴木伸一・矢ヶ崎朋樹 pdf

はくさん第38巻3号 2010 白山亜高山帯・高山帯の植物と「いしかわレッドデータブック <植物編> 20 古池博 pdf

白山の自然誌21 白山の禅定道 小川弘司 石川県白山自然保護センター 2001 pdf

いしかわレッドデータブック植物編 石川県 2010 pdf

白山への道と信仰 金沢市立玉川図書館近世資料館 2017 pdf

白山の自然誌11 白山の高山植物 石川県白山自然保護センター 2010 pdf

東洋大学大学院紀要 45 2008 日光、箱根を対象とした観光地形成過程についての考察 野瀬元子 pdf

岐阜薬科大学紀要 43 1994 ミュンチング著『アールドゲワッセン』の飯沼慾斎による模写図について 水野瑞夫・遠藤正治・松田清 pdf

慾斎研究会だよりNo.1~121 総目次 慾斎研究会 pdf

慾斎研究会だよりNo.108 2006 飯沼慾斎『草木図説』のシミレータチスミレを例に― 山田直樹・河村典久・中井秀樹
草木図説目録. 草部 1874 国立国会図書館デジタルコレクション

近世植物・動物・鉱物図譜集成 第8巻 草木図説 稿本 草部 (2) 科学書院 2006 pdf

草木図説. 前篇 / 飯沼慾斎 著述 ; 田中芳男, 小野職慾 増訂 1874 国立国会図書館デジタルコレクション

慾斎研究会だよりNo.101 2004 『草木図説』稿本のデジタル画像 水野瑞夫・江崎孝三郎・田中俊弘・酒井英二・遠藤正 pdf

岐阜薬科大学紀要 11 1961 飯沼慾斎遺稿による採薬地の考察 嶋野武・水野瑞夫・江崎秀子 pdf

人間環境科学 5 1996 日本における植物学の曙 増田芳雄 pdf

日本植物研究の歴史小石川植物園300年の歩み 大場秀章 東京大学総合研究博物館 1996 pdf

岐阜薬科大学紀要 46 1997 その後の「飯沼慾斎」研究 水野瑞夫・遠藤正治 pdf

近世日本におけるハウトイン「自然誌」の利用 平野満 明治大学図書館 2002 pdf

Journal of Ecology 91 2003 *Primula farinosa* L. D. J. Hambler・J. M. Dixo pdf

日本列島本州における コイワザクラ節 (sect. *Reinii*) 内2種4変種 杉原早紀 不明 pdf

奈良県の植物研究史序説 (二) 1979 pdf

東海自然誌 第3号 静岡県自然史博物館ネットワーク 1979 我国における生物学研究の歩み 斎藤全生 pdf

関西自然科学、第18巻 関西自然科学研究会 1966 日本における今から百年以上の古い時代に手記或は印刷された植物関係書 小清水卓二 pdf

慶應義塾大学日吉紀要 47 慶應義塾大学 2010 尾張の菅百社とその周辺 磯野直秀 pdf

慶應義塾大学日吉紀要 46 慶應義塾大学 2009 小野蘭山年譜 磯野直秀 pdf

福岡教育大学紀要 第38号 福岡教育大学 1989 「採薬記」の世界 板坂耀子 pdf

駿台史學 124 明治大学史学地理学会 2005 小野蘭山「採薬記」の成立と転写系統の検討 平野満 pdf

東京大学創立百二十周年記念東京大学展 学問の過去・現在・未来 第一部 東京大学総合研究博物館 1997 伊藤圭介 大場秀章 pdf

慶應義塾大学日吉紀要 45 慶應義塾大学 2009 資料別・草木名初見リスト 磯野直秀 pdf

参考書誌研究. (59) 国立国会図書館 2003 伊藤圭介編著「植物図説雑纂」について 磯野直秀 pdf

シーボルト日本コレクション 東京大学総合研究博物館 2005 シーボルトと彼の日本植物研究 大場秀章 pdf

ハーバリウム及び黎明期の日本植物研究の歴史 大場秀章 pdf

Flora laponica Thunberg 1784 Google Books

造園雑誌 57巻1号 1993 近代日本における植物図鑑の発達とその背景 俵浩三 pdf

植物の学名を読み解く 田中學 2012 pdf 自費出版デジタル

野生のサクラソウ ガーデンライフ・東京山草会 誠文堂新光社 1977 日本のサクラソウの分布 井上健
日本のサクラソウの種類 井上健
日本のサクラソウの仲間の生態 斎藤常夫
自生地に学ぶユキワリソウの仲間 高橋幹男
サクラソウの仲間 文化史 大垣晃一
日本のサクラソウの研究史 井上健

研究紀要 Vol.17 富山県〔立山博物館〕 2010 芦峯寺宿坊家の尾張国檀那場と三禅定（富士山・立山・白山）関係資料 福江充
「三禅定」考 加藤基樹

研究紀要 Vol.18 富山県〔立山博物館〕 2011 中世「三禅定」覚書 加藤基樹

日本博物学年表 白井光太郎 1891 国立国会図書館デジタルコレクション